HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ソ連の学校における少女の物語文化
Author(s)	越野, 剛
Description	ISBN: 9784938637491
Relation	共産圏の日常世界. 望月哲男編
Citation	スラブ・ユーラシア研究報告集, 1, 21-34
Issue Date	2008-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47670
Type	departmental bulletin paper
File Information	SEP1_004.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ソ連の学校における少女の物語文化

越野　剛

10年くらい前から「学校のフォークロア」がロシアで一種のブームになっている。落書き、替え歌、怪談（ストラシルキ）、スペードの女王の呼び出し、残酷なポエムなど様々な子供のフォークロアの存在が報告されている。研究史的にはベロウソフらが出した『ロシアの学校のフォークロア』（1998年）がひとつの集大成となった[1]。筆者もかつてロシアの子供の怪談について報告したことがある[2]。今回とりあげる女の子の手書き小説も学校のフォークロアのサブジャンルのひとつである。

学校のフォークロアは、都市伝説やアネクドート等を含んだ現代のフォークロアというもっと大きな研究対象の一分野と考えることもできる。こちらも90年代初めごろから研究が盛んになっている。フォークロア専門誌『ジヴァヤ・スタリナ』が1995年の第1号で特集を組み、民俗学者ネクリュドフやロシア人文大学の研究グループが中心になって「ポスト・フォークロア」という概念を提唱した。これは現代のフォークロアを幅広く囲みこむ学術上のタームとして認知されてきているようだ[3]。2003年には同じグループによって『現代都市のフォークロア』という注目すべき論集が出された[4]。フォークロアというと農村でおばあさんが語る口伝えの文芸だというステレオタイプがあるが、それに対して例えば現代の都市の若者を対象とするようなフォークロアを考えるとよいだろうか。語られた言葉だけでなく、「不幸の手紙」や素人文芸（ナイーブ文学）のように書かれたテキストを重視する特徴もある。もちろんこれらは大雑把な対比であり、フォークロアとポストフォークロアの間に明確な境界線があるわけではなく、今まであまり研究されていなかった領域にも眼を向けようということであろう。学校のほかに、病院、軍隊、刑務所といった場所が研究のフィールドになっていることも興味深い。

「女の子の手書き小説（рукописный девичий рассказ）」は学校のフォークロアのジャンルのひとつで、女子生徒に人気のある恋愛をテーマにした短い物語である。ほとんどの作品は作者が誰であるか知られておらず、ノートからノートに書き写されることで、クラスや学校を超えてソ連全土に広まった。口承文芸とはいえないがフォークロア的な性質を持つと考えられる。社会学者セルゲイ・ボリソフが80年代末から資料を集めており、このジャンル

1　*Белоусов А.Ф.* (сост.) Русский школьный фольклор: От «вызываний» Пиковой Дамы до семейных рассказов. М., 1998.

2　越野剛「ロシアの子供の怪談（ストラシルキ）」『スラブ研究センター研究報告シリーズ』88号、2002年。

3　http://www.ruthenia.ru/folklore/index.htm（プロジェクト「フォークロアとポスト・フォークロア」の公式サイト）

4　*Белоусов А.Ф., Веселова И.С., Неклюдов С.Ю.* (ред.) Современный городской фольклор. М.: Российский государственный гуманитарный университет. 2003.

の研究では第一人者となっている。本論で扱うテキストもボリソフが編纂した資料集『女の子の手書き小説』（2002 年）に依拠している [5]。そこには 61 種類の手書き小説が記載されているが、主人公は概ね男女の学校生徒であり、恋人の片方もしくは両方が死んでしまう悲劇的・感傷的な物語が多い。

ロシアの少女たちが手書き小説を書き写すのに用いるノートはしばしば「アルバム」と呼ばれる。そこには本論で取り上げる小説の他にも、詩や占いや友人からのメッセージなどが書き込まれる。こうしたアルバム文化は起源をたどれば 19 世紀の貴族の家庭やサロンにあったもので、プーシキンなどの詩人も知り合いの夫人や令嬢たちのアルバムに作品を書き残している。興味深いのは貴族社会では男性や大人の女性もアルバムを所有していたことだが、19 世紀の後半にはアルバム文化の主たる担い手は女学生となる [6]。女子寄宿学校やギムナジウムの生徒たちが私的なノートに詩やイラストや教訓話を集めていたことが知られており、革命後の門戸を拡大した普通学校では農村出身の女生徒によって民謡などのレパートリーが加えられながらもアルバムの伝統は引き継がれた。1920-30 年代のアルバムの内容はまだ詩やロマンスの歌詞が中心で、散文小説のジャンルは貧弱だった [7]。ボリソフは手書きの恋愛小説が現れたのは戦後の 50-60 年代と推測しているが（36）、彼が収集したノートは 1980-90 年代が中心であり、少女のアルバムのジャンル構成が変遷してきた過程はよく分かっていない。一方で現代の軍隊や少年院では男性のアルバム文化も維持されていることが明らかにされている [8]。

本論ではまず女の子の手書き小説の典型的なプロット構造を明らかにした後に、学校という制度が恋愛物語に及ぼした影響を考察し、最後にエロスと死という特徴的なモチーフについて検討する。テキストはボリソフのものを用いるが、主に分析する 14 話について簡単なあらすじを論文の後に付した。

1. プロットとキャラクターの類型

女の子の手書き小説は決まったパターンが多く、あまり込み入ったあらすじになることは少ない。最も典型的なプロットの例として『恋敵』（3 番）を挙げることができる。主人公のリューダがちょっと不良ぽい男の子と仲良くなるが、そこにライバルが現れて彼が好きなのは私だと嘘をつく。ショックのあまり駆け出したヒロインは車に轢かれて死に、不良少年も後を追って自殺する。恋愛の成就、ライバルによる妨害、主人公の死と恋人の後追い自殺、手書き小説の最もありがちなストーリー展開である。

---

5 *Борисов С.Б.* (сост.) Рукописный девичий рассказ. М.: ОГИ, 2004. 初版から 2 年後に出た改訂版。以降、同書からの引用は（）内のローマ数字によって頁数を示す。

6 *Вацуро В.Э.* Литературные альбомы в собрании пушкинского дома (1750-1840-е годы) // Ежегодник рукописного отдела пушкинского дома на 1977 год. Л., 1979. С. 3-56.

7 *Головина В.В., Лурье В.Ф.* Девичий альбом XX века // *Белоусов* (сост.) Русский школьный фольклор. С. 269-301.

8 *Калашникова М.В.* Современная альбомная традиция // *Белоусов и др.* (ред.) Современный городской фольклор. С. 599-619.

『私を忘れないで』（1 番）はソ連全土を通じてよく知られた話であり、バルトからシベリアまで類似したテキストが 6 種類も見つかっている（ラトヴィア語版も存在する）。上に挙げた『恋敵』のように単純な短いエピソードだけで終わるのではなく、段階を踏んだ恋愛の深まりが描かれているが、基本的な話の構造は同じである。主人公アリョーナは転校してきたオレーグと仲良くなる。告白の場面があって恋愛が成就するかに見えるが、初めてキスを交わした夜にオレーグは何者かに刺し殺される。主人公のアリョーナも車道に飛び込んで後追い自殺する。

『私を忘れないで』にはオレーグが語るかたちで印象的な作中作が挿入されている。雌雄の白鳥が仲睦まじく暮らしているが、たまたま片方が殺されると、残された白鳥は空から羽をたたんで墜落死するというものだ。短い挿話ではあるが、主人公の死と恋人の後追い自殺という手書き小説の典型的モチーフが織り込まれている。この白鳥の逸話に直接の源泉があるかどうかは分からないが、ギリシア神話のゼウスとレダからチャイコフスキーの『白鳥の湖』にいたるまで、ヨーロッパ文化における白鳥はエロスと死のシンボルであった [(9)]。他の手書き小説にも白鳥のイメージを見出すことができる。『イリーナ』（5 番）では残された恋人が後追い自殺するが、テキストのひとつは「こうして二人の恋は終わった。白鳥のようにひたむきで献身的な恋だった」（314）という文で閉じられている。結末で唐突に言及される白鳥のイメージには、『私を忘れないで』のロマンチックな挿話が念頭に置かれているのかもしれない。『裁判』（2 番）の 6 つのテキストのうち 4 つでは主人公の姓がレーベジェフとなっているが、これもロシア語の白鳥（レーベジ）に由来する名前である。

恋愛の成就やライバルによる妨害というモチーフは共通していても、後追い自殺が欠けていたり、恋人のどちらも死なずにハッピーエンドに終わる場合もある。『愛と友情の物語』（7 番）では恋敵が主人公に嘘をついて苦しませ、腫瘍に病んだ腹部を蹴飛ばして入院させてしまう。ここまでは同じパターンの展開に見えるが、意外にも主人公は無事に退院して恋人と結ばれる。ボリソフは手書き小説を分類して、恋人たちが死なずに終わるもの（計 30 話）、片方だけが死ぬもの（15 話）、二人とも死んでしまうもの（26 話）の三つに分けている。最初のグループが多いように見えるのは、どこにも当てはまらないタイプの多くがそこに分類されているからである。しかも結末だけ入れ替えれば第 2・第 3 のグループと同じ話になるものも多い。したがって後追い自殺まで含めたパターンを「完全形」として仮定しておきたい。

それでは手書き小説の典型的なプロットとモチーフをもっと詳細に見ていくことにしよう。研究者によって分類の基準は違うが [(10)]、ここでは物語の展開を **4 段階に分ける。恋愛**の始まり、恋愛の成就（深化といってもよい）、恋愛の試練（恋敵の妨害を含む）、そして恋愛の結末である。女の子と男の子が出会う契機としては、どちらかが転校生としてクラスにくる場合が目立つ。『裁判』（**2 番）の主人公は引っ越した先の学校で風変わりな女の子と出**会う。『私を忘れないで』や『初恋の物語』（**8 番）では夏休みに主人公が出会った男の子が**

9 **上村くにこ『白鳥のシンボリズム』御茶の水書房、1990 年。**

10 *Кутанина Т.А.* Сюжетные традиции девичьего рукописного рассказа // *Борисов* (сост.) Рукописный девичий рассказ. С. 496-511; *Жаворонок С.И.* Девичьи рукописные любовные рассказы // *Белоусов* (сост.) Русский школьный фольклор. С. 185-194.

転校生として再登場する。**9月1日という始業式の日付は、卒業式とならんで大事な時間の**サイクルを示す。恋愛の始まる契機としては、『フィナーレ』（**9番**）『**真実の愛**』（**10番**）『**愛**の物語』（**11番**）**のように、友達や兄弟から相手を紹介される場合もある。**

恋愛関係がだんだんと深まって成就するプロセスは、告白・キス・性的関係の三つのモチーフで示されるが、最も重要なのは愛の告白と見なされている。他の二つの要素は欠けることがあっても、「好きです люблю тебя」という告白の言葉だけは恋愛にとって不可欠なものとされる。例えば『初恋の物語』では、ライバルに騙され、絶望して川に身を投げたヒロインを追って男の子も飛びこみ、二人して溺れ死ぬ直前にようやく愛の告白がなされる。

映画館やピオネールのキャンプなど恋愛が深化するプロセスは様々な場所と結びつくが、最も頻度の高いのはダンスパーティー（誕生日、新年・クリスマス、卒業式）である。このとき男の子が誰をダンスに誘い、それが受け入れられるかどうかで、その時点での登場人物たちの関係が明らかにされる。とりわけパーティーのあとで女の子を家まで送る道のりは、愛の告白などの重要な出来事が行われるための時空間といってよい。

第3段階の恋愛の試練は手書き小説の中で最も多様性に富んだ部分になっており、恋敵の妨害、妊娠、遠距離などのモチーフを挙げることができる。恋敵が最も得意とするのは嘘をつくことで、偽りの情報で主人公と恋人との間に誤解を生じさせる。『真実の愛』では遠距離の彼氏から送られてくる手紙を盗み、自分宛に届いたかのように主人公に見せびらかす。恋敵の姉が郵便局で働いていたので手紙を自由にできたというくだりには、停滞期のソ連では実際にありそうなリアリティを感じるがいかがだろうか。『裁判』のスヴェータはもっと行動的で、気に食わないヒロインをナイフで刺し殺してしまう。

手書き小説の世界では、たった一度でも性行為が行われた場合、きわめて高い確率で妊娠のモチーフが後に続く。『チューリップ』（**6番**）**のように妊娠が望まれたものでなかった場**合は男の裏切りという破局に向かうが、『イリーナ』（**5番**）**のように激怒した親によって妊**娠した主人公が苦境に陥る場合もある。遠距離恋愛のモチーフはソ連の徴兵制度と結びついたものが多いが、『真実の愛』（**10番**）**のように進学と結びついたものもある。『イリーナ』**の物語では主人公が妊娠するだけでなく、恋人は徴兵されて町を去ってしまうというように二重の試練が課される。

恋敵の妨害、妊娠、遠距離などの試練は恋人の裏切りというモチーフをしばしば導く。『チューリップ』のように裏切りがそのまま恋愛物語の終りを意味する場合もあるが、さらなる試練のモチーフとして物語をつなぐこともある。『たとえばこんな恋』（**4番**）**の主人公**は遠距離恋愛に耐えられず、裏切って別の男と結婚する。ところが夫はアルコール中毒になって暴力をふるい、やつれはてた主人公は病死してしまう。それでも遠距離から帰ってきた最初の恋人が後追い自殺することで、悲劇的ながら恋愛は成就したとも考えられる。

最終段階の恋愛の結末は、恋人のひとりが死んでもうひとりが後追い自殺するというのが最も典型的であり、「完全形」と見なすことができる。結ばれるにしろ裏切られるにしろ誰も死なない場合、あるいはひとりが死んでも後追い自殺がない場合もあるが、そうした結末はプロットの構成的には取替え可能なものでしかない。むしろ現世では結ばれなかった二人が死ぬことで、単なるハッピーエンドよりも遥かにロマンチックで崇高な恋愛の成就がなさ

れるのだ。ナイフによる自刃、首吊り、服毒、車道への飛び込みなど自殺の形態は様々だが、カラムジンの『哀れなリーザ』の伝統を引き継ぐ入水自殺が最もセンチメンタルな手段として好まれているようである[11]。

次に登場人物の類型について簡単に触れる。ほとんどの手書き小説には主人公とその恋人、そしてライバルの三人しか登場しないため、登場人物のヴァリエーションはそれほど多くはない。主人公的な位置にいるのは女の子のことが多いが、『裁判』（2 番）の場合は珍しく男の子の視点から物語が進行する。意地悪な恋敵もたいがいの作品では女性だが、『余計な第三者』では男性の恋敵が登場する。しかも邪魔な男の子を刺し殺して、定番どおりに女の子が後追い自殺すると、恋敵までが続いて後追い自殺する。誰も生き残らないにも関わらず、その夜が「彼らの一生の記憶として残った」（362）と書かれているのが大げさで微笑ましい。

それ以外の登場人物の役柄としては援助者・保護者・悲嘆者の三つを仮定してみたい。援助者というのは主人公の恋愛の手助けをしてくれる人という意味であり、恋愛に不慣れな主人公に恋人を紹介することでその役割の全てを終える。『フィナーレ』（9 番）や『愛の物語』（11 番）の主人公の友達や、『真実の愛』の主人公の兄などが該当する。親や学校の先生は恋愛面では援助者とはいえない。『裁判』や『愛と友情の物語』（7 番）に登場する女教師には主人公を見守るような保護者的な役割が与えられている。ただし援助者も保護者も手書き小説の中ではあまり重要な存在とは感じられない。むしろ印象的なのは、主人公の死を嘆き悲しむ親（特に母親）の姿である。物語の多くは死んだ恋人たちの葬儀の場面で幕を閉じる。「泣き女」を思わせるような母親の悲嘆者としての役割は、手書き小説の中で重要な位置を占めているように思われる。

2. 学校と恋愛―制度からの逸脱と逸脱の制度化

女の子の手書き小説というジャンルの構造的な特徴として、主たる舞台となる学校が公的な制度であるのに対して、主たるテーマである恋愛は極めてプライベートな体験であり、その両者が結びついているという点を挙げることができる。制度や規範から逸脱する側面と、逸脱したものが制度化されるという双方向の力が働いているともいえる。恋愛の私的な時空間が社会の規範的な時空間から切り離されているように見えながら、実は学校的な時間のサイクルによって規制されてもいる。夏休み、新学期（9 月 1 日）、卒業式などの学校の年間行事が小説のプロットの中では恋愛プロセスの節目と一致する。主人公が宿命的な出会いを体験する機会は、『私を忘れないで』（1 番）『裁判』（2 番）『初恋の物語』（8 番）では夏休みや新学期と重なっている。恋人同士が現世で祝福を得ることができずに死ぬというモチーフは、あの世での恋愛の成就として学校的な時間からの超越と見ることができる一方で、卒業式という学校の行事と結びつくことが多い。例えば『私を忘れないで』のヒロインは卒業式のパーティーで恋人の悲劇的な死を物語り、それが終わると車道に飛び出して自殺する。『余計な第三者』（13 番）と『マリイカ』（14 番）の主人公たちも卒業と同時に死ぬ。『イリーナ』（5 番）では卒業式が恋人との出会いの場面であると同時に、妊娠という試練と主人公の死に結

11 *Жаворонок.* Девичьи рукописные любовные рассказы. С. 189.

びついている。

ボリソフが集めたアルバムはほとんどが 80 年代以降のものだが、いくつか古い時代にさかのぼると思われる手書き小説もある。『愛の物語』（11 番）のテキストのひとつは 90 年代初めに書き写されているが、内容のディテールから判断すると原初のテキストがかなり古いものだと推測できる。アルバムの所有者は自分がテキストを一字一句そのまま書き写したことを証言している（238-239）。小説の末尾に 1953 年モスクワでの出来事だったと記されているほか、第 36 回革命記念日、チフスの流行、共同住宅（コムナルカ）に住む家族などの描写が 50・60 年代の生活風景を想起させる。とりわけ興味深いのは、ヒロインと男の子の交際を「同志」（232）の関係や「ソビエト的タイプの友達づきあい」（233）と呼ぶ表現である。こうしたイデオロギー的な語彙は他の手書き小説の物語にはあまり見られない。『愛の物語』には他に 4 種類のテキストが知られているが、プロットは全く同型でありながら上述したような社会主義的な語彙だけがきれいに抜け落ちている。

シュラペントフが指摘するように、フルシチョフからブレジネフの時代にかけてのソ連は公的なものよりも私的なものを重視する社会に変化した [12]。70・80 年代の「停滞の時代」に手書き小説のテキストにもそうした価値観の転回が影響したと考えられる。『愛の物語』には主人公と恋人双方の両親や友人たちなど脇役が多く登場するが、他の手書き小説では恋人たちとライバル以外の登場人物はたいした役割を持たないのが普通である。手書き小説には母親と比べると父親はあまり出てこないが、『愛の物語』の上述のテキストでは恋人の父親が「ソヴィエト的タイプの友人」という教訓を垂れるのも印象的である。集団的な物語の展開や父親のイデオロギー的役柄は社会の公的秩序と結びつく。しかし現存する手書き小説の多くでは、恋愛をめぐる狭い人間関係の中でのみ物語は展開し、主人公の死を嘆く母親の役柄が父親の影を薄くしている。ただし 80 年代以前の時代に属すると確定できるテキストが見つかっていないため、こうした対比は暫定的な仮説にすぎない。『マリイカ』（14 番）でもクラスメートが団結して行動したり、コムソモール員が重要な役割を果たしたりしており、古い時代相を残しているのかもしれない。

ソ連の学校では文学教育が非常に重視され、日本でいえば国語と道徳の授業を足し合わせたような重要な役割を期待されたことはよく知られている [13]。女の子の手書き小説にも学校の文学教育が独自の刻印を残しているように思われる。例えば『裁判』（2 番）の物語はプーシキンの『エヴゲニー・オネーギン』を下敷きにしていることが明らかだ。手書き小説には珍しく男の子の視点から書かれていることや、あまり社交的ではない変わり者のターニャ（タチアナ）というヒロインの名前と性格付けからもそれは推察できるが、決定的なのは手紙のモチーフである。ターニャは主人公の男の子に「つきあってほしい」という手紙を書くが、これは『オネーギン』のタチアナが当時の慣習に反して女性から男性に手紙を書くというエピソードを借用している。『裁判』には学校の文学授業の場面があるが、そこでターニャが『オネーギン』の一節を上手に朗読するのも示唆的である。

12 Vladimir Shlapentokh, *Public and Private Life of the Soviet People: Changing Values in Post-Stalin Russia* (N.Y.: Oxford UP, 1989).

13 Felicity O'Dell, "Socialisation in the Literary Lesson," in Jenny Brine, Maureen Perrie, Andrew Sutton, eds., *Home, School and Leisure in the Soviet Union* (London, 1980), pp. 92-109.

女の子の手書き小説というジャンルには学校で習うような古典的な文学作品の模倣という側面がある。しかしながら少女の抱く欲望にそった要素（例えば『オネーギン』のヒロインの魅力的な性格とふるまい）だけが取捨選択されて、あるいは過剰に強調されて用いられるという側面も見過ごすことはできない。『オネーギン』の主人公の余計者的孤独といった小難しい主題は捨象される。私自身の恥ずかしい読書体験を告白するなら、ドストエフスキーの『悪霊』を初めて読んだ時にちっとも内容を理解できず、脇役のシャートフが別れた妻のマリアとよりを戻した直後に殺され、マリアは後を追うようなかたちで死ぬというメロドラマチックな場面だけが鮮やかに記憶に残ったことがある。

文学の授業では『裁判』のターニャが得意としていたようにテキストを暗唱することが求められた[14]。創作的要素を含んだ作文教育に多くの時間が割り当てられていたことも重要である[15]。手書き小説の文体に俗語やジャルゴンがほとんど混入していないのもこうした文学教育の賜物であろう。小説ジャンルに特有の凝った文体やプロットが用いられるのも面白い。『裁判』は枠小説の構造を取っており、冒頭の裁判の場面ではすでに主人公が殺人を犯して裁かれており、彼が自分の犯罪の理由を告白することによって物語は過去へさかのぼる。『私を忘れないで』（1 番）もヒロインが自殺する直前に過去を回想するという同じような始まり方をするし、『恋敵』（3 番）と『初恋の物語』（8 番）は主人公が悩ましげな様子で家を出て行き、母親を心配させる場面が冒頭に置かれている。少女たちはしばしば小説的な文体や情景描写を模倣しようと努めているが、とりわけ冒頭の書き出しにそれが目立つ。『初恋の物語』の冒頭の一行目は「静かで暖かな夜、ひらひらと雪が降っていた。アントニナ・イヴァノヴナは笑みを浮かべて部屋に入り、雪を払い落として言うのだった」（303）となっている。『私を忘れないで』の書き出しは、「卒業パーティーの日だった。明りがまたたき、光が燃えていた。音楽が流れて、男女の組が踊っていた。私は柱の影で肩を震わせている女の子を見つけた」（259）と始まる。小説的な文体の採用は手書き小説を口承のフォークロアと区別する最大の特徴であろう。

> 恋愛の定理
> 条件：親愛なるひとよ、二つの赤い唇の平方はキスに等しいことを忘れるな。
> 証明せよ：七月のない一年はなく、花の咲かない七月も存在しない。キスのない愛は存在せず、キスの中に愛の全てがある。
> 解答:キスを怖れるなら、恋などしないようにせよ。キスのない愛など決してありはしない。（29）

これも手書き小説と同じように少女のアルバムノートに書かれていた「恋愛の定理（Теорема любви）」というテキストである。「条件（дано）」「証明せよ（доказать）」「解答（доказательство）」は数学の証明問題で用いられる術語であり、「恋愛の定理」も学校教育のパロディと考えられる。「二つの赤い唇の平方はキスに等しい」という条件が与えられたうえ

14 O’Dell, “Socialisation in the Literary Lesson,” p. 96.
15 浜本純逸「СОЧИНЕНИЕ（自由作文）について：ソビエトの作文教育 3」『福岡教育大学紀要文科編』第 21 号、1972 年、11-20 頁。

で、「キスの中に愛の全てがあること」を証明せよという問いが立てられ、正しい答えは「キスのない愛はない」ということだろう。数学の証明問題をパロディによって恋愛の法則に置き換えることは、学校教育という規範からの逸脱のように見える一方で、少女たちの空想する恋愛が学校制度によって規範化されていると考えることもできる。女の子の手書き小説においても、恋愛のあり方というプライベートな領域に属するように思われる事柄が、学校の文学教育によってモデルや規範を与えられているのである。

3. エロスと死―少女の不安と物語の快楽

女の子の手書き小説では、学校の卒業や恋愛の成就がしばしば主人公の死に結びつく。そこには大人になることへの不安や思春期の悩みが恐らく反映されている。『ファラオ』(12 番)の主人公は心ならずも妊娠してしまい、相手の男と結婚する。小説の結末には大人になって家庭生活を始めることへの漠然とした不安感が表現されている。『ファラオ』には 5 種類のテキストが知られているが、それぞれの最後の一文を挙げてみよう。主人公が死なないという点ではハッピーエンドではあるが、微妙な苦さと諦観の漂う幕切れである。

「家に入って、オーリャが見たのはダブルベッドとその隣の子供用ベッドだった。オーリャは自由な生活が終わったことを悟るのだった」(77)
「マリーナは子供時代が終わり、家庭の生活が始まったことを悟った。娘らしい春も、真実の愛さえも体験しなかったというのに」(82)
「マリーナとセルゲイは幸せに暮らした。けれどそれは青春時代が気づかないうちに過ぎてしまったということなのだ」(85)
「マリーナは子供時代が終わり、家庭の生活が始まったことを悟った。マリーナは微笑んだ。青春時代は気づかないうちに過ぎてしまったのだ」(87)
「彼女は青春時代が終わり、本物の大人の生活が始まったことを悟った」(89)

大人の女性を意味する женщина という単語も手書き小説ではしばしば不吉なニュアンスをはらんで用いられる。『真実の愛』(10 番)では、恋人と初めて肉体関係を結んだ後で、ヒロインは自分がもう子供ではないと感じる。「彼女はエジクがタバコを吸うところを初めて見た！そう、彼はもう大人なのだ。女の子にすぎない私でも女(женщина)になることができたのだわ。彼女はエジクが自分を砂の上に押し倒したときのことを思い出した。彼の目はまるで獣のようにぎらぎらしていた」(331)。男が吸うタバコや欲望に燃える眼差しのイメージが、否応なく大人にされてしまったヒロインの不安な心理を浮かび上がらせる。『フィナーレ』(9 番)のヒロインは相手の男に身体を要求されて拒むが、「女(женщина)」と呼ばれたことで心が折れて身を任せてしまう。「男のいうことを聞けないなんて、なんて女だ。彼は彼女のことを女と呼び、それで彼女は屈服した」(89-90)。ヒロインを陵辱する男はウォッカの匂いや口ひげの感触で大人であることが強調されてもいる。

ただし手書き小説は少女の不安だけを映し出しているわけではない。そもそも小説を書き

写すという行為は非常な労力を要するはずであり、少女にそれだけの意欲を抱かせる魅力が手書き小説というジャンルに備わっていなければおかしい。そうした魅力を仮に物語の快楽と名づけるとすれば、その快楽にはエロスと死という二つの側面を指摘できる。両者は小説のプロット構成の上ではしばしば緊密に結びついており、『裁判』や『私を忘れないで』のように、恋人たちが始めてキスを交わした夜に一方が殺されたり、『初恋の物語』（8 番）のように愛の告白の場面がそのまま二人が死ぬ場面であったりする。

これらは割とプラトニックな恋愛を描いているが、もっと露骨にエロチックな描写の例も多い。手書き小説は学校の少女にとって一種のポルノグラフィとして機能していたとさえいえるだろう。例えば『真実の愛』でヒロインが始めてキスを交わす場面の描写は甘く官能的なエロスに満ちている。「彼の手が触れると甘いけだるさが全身を貫いた。ヴェーラが黙っていると、彼は彼女のほうへ身を傾けてきた。彼の眼、愛しく近しい唇。その唇はどうして彼女に近寄ろうとするのだろう、ちょっと振りむいただけで温かな唇が触れた。かくも長いキス。知る人はだれもいない。家には誰もいないのだから ...」（329）。

しかし性交そのものはむしろ恐怖感を伴って描かれることのほうが多い。『フィナーレ』では友人の紹介で知り合った男がヒロインを部屋に監禁して、肉体関係を無理強いする。「ナターシャは鍵が閉められる音を聞いたとき、すべてを悟った。彼女は辛くなって泣き出した。ジャックはガウンを着て部屋に入ってきた。（...）彼女は息苦しかったが、そこから抜け出すことはできなかった。ジャックが彼女を抱きかかえ、ベッドに降ろしたのが分かった。力を奪われて彼女は身動きがとれなかった。とつぜん彼女は誰かの重い身体が圧しかかってくるのを感じた。彼女はもう抵抗できなかった」（90）。もちろん怖い場面でどきどきするのも一種の快楽ではある。『フィナーレ』はほとんどが濡れ場だけで構成されているポルノ小説的な作品であり、しかも結末では主人公が男と一緒にパリに移住して幸せになるという能天気なハッピーエンドが用意されている。学校の少女たちにとって手書き小説における性的な主題は、大人になることの憧れと不安という二律背反的な意識に働きかけるものなのであろう。

エロスだけではなく物語における死もまた快楽を導くことができる。文学作品の中で人の死に涙することにはカタルシス的な快楽の効果がある。手書き小説の結末では人々が集まって恋人たちの死を嘆く葬儀の場面が設けられている。悲嘆者としての母親の役割の重要さについては先に述べたとおりである。『私を忘れないで』で何者かに刺し殺された男の子の葬式では、残されたヒロインよりも男の子の母親の嘆きの方が過剰と思われるほど強調されている。

> とつぜん私は母親と眼を見合わせた。彼女は私を見ると、狂ったように棺に駆けよった。
> 「オレーグ、愛しいおまえ」、まるで棺から抱き上げようとするかのように、母は息子に手を差しのべた。「愛しい息子よ！どうしてこんなことに？お前は何も悪いことなんかしていないのに」
> （...）母親は連れて行かれたが、なおも激しい声で叫んでいた。その叫び声で私は心臓が張り裂けそうだった。（265）

子供にはトム・ソーヤのようにしばしば自分が死んで親がそれを悲しんでいるところを空想して楽しむ性癖がある。恋愛小説を書き写す少女たちも、悲劇的に死ぬ主人公に自らを重ね合わせているのではないだろうか。『マリイカ』（14 番）では親は表に出てこないが、恋人やクラスメートが早すぎたヒロインの死を嘆く場面がしつこいほどに繰り返される。悲嘆の快楽効果を考慮に入れないなら、主人公が死んだ後に延々と続くテキストの後半部分の描写は不可解にすら思えるだろう。

結語：ジャンルの未来

女の子の手書き小説の主たる読者は 10 から 16 歳の少女である一方で [16]、物語の主人公はもっと年上の学年だったり、結婚して子供を産むこともできる大人の女性として設定されている。幼い少女たちはちょっとだけ背伸びすることで、エロスと死の大人の世界をどきどきしながらのぞき見るのであろう。ボリソフは少女が手書き小説を読むことに通過儀礼的な機能を見ている（43）。

日本では大塚英志や本田和子をはじめとして少女の文化研究に多くの蓄積があり、エロスと死やサブカルチャーと通過儀礼などのテーマについてはすでに語り尽くされたような感がある [17]。それではソ連の少女文化に固有の要素を取り出すとなると、地下出版（サミズダート）や中世の写本を連想させるような手作業による長大なテキストの書き写しという行為、あるいはプーシキンなどの古典文学のテキストに対する偏愛を挙げることができよう。その理由としては、ソ連時代には文学が児童向けと大人向けに二極化しており、性的な好奇心にあふれた思春期の子供を満足させるような作品が欠如していたことが考えられる。少女向けの児童文学もあまり発達しなかった。帝政末期に人気のあったリディヤ・チャールスカヤの「少女小説」が、革命後は批判の対象になって図書館から姿を消してしまった経緯もある [18]。少女の欲望を担う媒体はソ連の公的情報空間には存在せず、その飢餓を満たすために非公式な文化であるアルバムの手書き小説が選ばれたのだろう。材料としては学校教育でふんだんに提供される文学のテキストが好まれたが、他に使えるものがなかったのも事実である。

ソ連崩壊後のロシアでは大衆小説の商業出版が活性化し、リュドミラ・マトヴェエヴァやヴォロベイ姉妹などの少女向け通俗小説が書店で簡単に手に入るようになった。役割を終えた手書き小説の伝統は衰えていくのだろう。一方ではアマチュア的な創作意欲は学校のノートではなくネット上の電子テキストで展開されるとも考えられる。『指輪物語』『ハリーポッター』などの娯楽映画や『セーラームーン』などの日本アニメを材料にした二次創作であるファンフィクション（фэнфик）が、ネットを中心に現代ロシアで流行の兆しを見せている [19]。

16 *Жаворонок.* Девичьи рукописные любовные рассказы. С. 185.

17 大塚英志『少女民俗学』光文社、1989 年；本田和子『オフィーリアの系譜：あるいは、死と乙女の戯れ』弘文堂、1989 年。

18 *Кулешов Е.В.* Предисловие // *Борисов.* (сост.) Рукописный девичий рассказ. С. 17.　チャールスカヤについては次の文献を参照：久野康彦『革命前ロシアの大衆小説：探偵小説、オカルト小説、女性小説』博士号学位論文、2003 年、122-144 頁。

19 *Линор Горалик.* Как размножаются Малфои – Жанр «фэнфик»: потребитель масскультуры в диалоге с медиа-контентом // Новый Мир. 2003. № 12. С. 131-146.

手書き小説の書き手たちの眼差しはそちらに向かうのかもしれない。二次創作もまたエロスと死によって原作を改変する文化的遊戯なのだから。

★本論で取り上げた手書き小説のあらすじ

① Помни обо мне わたしを忘れないで

卒業パーティーの会場で「私」は泣いている女の子に会う。アリョーナという名の彼女は自分が体験した悲劇を「私」に語り始める。16 歳のときに町に引っ越したばかりの夏休み、知らない男の子にパチンコ玉をぶつけられる。それがオレーグとの出会いだった。9 月 1 日になって新学期が始まり、彼女はオレーグと再会する。二人は次第に仲良くなり、新年をいっしょに祝うが、その際にオレーグが愛を告白する。「本当の愛というのはどんなものなのかしら」と問うアリョーナに、オレーグは白鳥の物語を紹介する。ある湖に二羽の白鳥が仲睦まじく暮らしていたが、心無い人のいたずらのせいで一羽が死ぬと、残された白鳥は墜落して自殺してしまったという。その後、友人の誕生日からの帰り道で二人は初めてキスをする。しかしその夜にオレーグは何者かに刺されて倒れる。病院でオレーグはアリョーナに手紙を託して死ぬ。打ち明け話を終えたアリョーナは、「私」にオレーグの手紙を見せる。そこで白鳥の物語を思い出した彼女は、「私」の目の前で車道に飛び出して自殺してしまう。（テキスト 6 種）

②裁判 Суд

冒頭は裁判の場面、「なぜ女を殺したのか」という裁判長の問いに答えて、被告の若者サーシャ・レーベジェフは語り始める。17 歳のときに引越して新しい学校に入った。そこで無愛想で変わり者のターニャに会うが最初は印象に残らず、別のクラスメートのスヴェータと仲良くなる。あるとき文学の授業でターニャはプーシキンの『エヴゲニイ・オネーギン』を素晴らしい声で朗読するが、次の幾何学の授業では間違えて先生に叱られる。ターニャは女優になる夢を先生に打ち明ける。春になって、サーシャの家に「つきあってほしい」という女の子からの手紙が届く。AT というイニシャルからそれがターニャだということが分かり、二人はつきあいはじめる。ターニャはキスを許してくれないし、誕生日パーティーではダンスに誘っても嫌がるが、二人の仲はだんだん親密になっていく。卒業後、ターニャは演劇学校に進学する。春になり、サーシャはようやく愛の告白をすることができる。二人は初めてキスを交わすが、帰り道でターニャは何者かに刺されて死んでしまう。犯人はターニャに嫉妬したスヴェータであることが分かり、激昂したサーシャは彼女を刺し殺してしまう。全てを話し終えたサーシャは自分の母親を近くに呼ぶよう裁判官に頼む。サーシャは裁判の前に毒を仰いだことを打ち明け、自分をターニャといっしょに葬ってくれるよう母親に頼み、そして力尽きて倒れる。（テキスト 6 種）

③恋敵 Разлучница

リューダは幼馴染で不良のセルゲイに良い影響を与えるように親から頼まれていた。その日もリューダはセルゲイといっしょに歩きながら、酒と煙草がどんなに身体に悪いか説いていた。ところがセルゲイはいきなりリューダに愛を告白する。リューダも彼のことが好きだったので喜ぶ。ところがそこにアリョーナが現れて、セルゲイが本当に好きなのは自分だと嘘をつく。ショックを受けたリューダは駆け出して車に轢かれる。三日後にセルゲイも列車に飛び込んで自殺する。

④たとえばこんな恋 Вот такая любовь

レーナは校長先生の娘、ヴィーチャは学校の雑役婦の息子。二人は愛し合っていたが、レーナの父はそれを認めようとしない。卒業式が終わり、ヴィーチャは兵役で極東へ行く。レーナはヴィーチャの子供を宿す。父親はヴィーチャからの手紙を隠し、不安になったレーナはユーリイと結婚する。やがてヴィーチャに似た娘が産まれる。ユーリイは酒に酔って暴力をふるうようになる。レーナは病気になって死ぬ。一年後にヴィーチャが戻り、レーナの墓の前で服毒自殺する。

⑤イリーナ（白鳥の忠実）Ирина (Лебединая верность)

卒業式はイリーナの誕生日と重なっていたので、彼女はクラスメートを家に招待する。パーティーが終わり、イリーナとボリスだけが残る。ボリスは愛を告白し、二人はそのまま性的関係を結ぶ。一ヵ月後にボリスは徴兵のため町を去る。イリーナは妊娠するが、それを知った母は怒る。家から追い出されたイリーナは服毒自殺する。休暇で軍隊から帰省したボリスはイリーナの死を知って、首を吊って自殺する。それは白鳥のように忠実な恋であった。（テキスト 3 種）

⑥チューリップ Тюльпаны

映画館でアーニャは昔話の王子様のような男の子ヴァレリイからチューリップをプレゼントされる。ヴァレリイは彼女を別荘（ダーチャ）のチューリップ畑に誘い、二人はそこで性関係を結ぶ。アーニャは妊娠するが、ヴァレリイは親戚のところに行く。やがて子供が産まれるが、ヴァレリイからは別れを告げる手紙が送られてくる。手紙に添えられていたチューリップの花束はまるで蛇の頭のように見えた。（テキスト 2 種、他に主人公が自殺する類話「黄色いチューリップ」のテキスト 2 種）

⑦愛と友情の物語 Роман о дружбе и любви

アレクサンドラはキリルと仲良くしている。新年のパーティーで女友達レーナが、キリルが好きなのは自分だと嘘をつく。ショックを受けたアレクサンドラはパーティーを飛び出す。学校が始まるが、失意のアレクサンドラは授業が頭に入らず先生に心配される。クラスでソフホーズの畑作業を手伝うことになるが、そこでもキリルとの仲違いは続く。ソフホーズから帰る日、レーナに腹を蹴られてアレクサンドラは入院する。病室のベッドの上でアレクサンドラはキリルに愛を告白するが、退院すると父親に連れられて町を去る。数年後、将校になったキリルはレーナとの結婚を決めるが、たまたま鉄道駅でアレクサンドラと再会して、ようやく二人は結ばれる。

⑧初恋の物語（氷は二人の頭上で閉じた）
История первой любви (Льдины сомкнулись над их головами)

夏休み、イーラは川で溺れた女友達ヴァーリャを助けてくれた男の子にひとめ惚れする。9 月の新学期に現れた転校生ボリスはそのときの男の子だった。ボリスもイーラを気に入り、スケート場でいっしょに滑りながら「この世界から彼女を連れ出したい」と思う。しかし嫉妬したヴァーリャはボリスが好きなのは自分だと嘘をつく。ショックを受けたイーラはボリスに最後の手紙を書いて、断崖から身を投げる。彼女を追いかけてボリスも川に飛びこむ。川の中で二人は愛を告白しあうが、そのまま溺れ死んでしまう。（テキスト 3 種）

⑨フィナーレ Финал

夏のある日、暇を持て余したナターシャは友達のナージャのうちに遊びに行く。そこでは若者が集まっており、ダンスが始まる。ナターシャは酔った男ジャックと踊るうちに、キスや愛撫を受ける。「女なのだから服従しろ」と命じられ、知らない家に連れて行かれる。そこで性的関係を強要される。翌日、ジャックは永久の愛を誓い、結婚登録所（ЗАГС）に行く。その後、二人はパリに移住して幸せに暮らす。

⑩真実の愛 Настоящая любовь

ヴェーラは兄ヴラジクからエジクを紹介される。夏、兄の誕生日パーティーでエジクがヴェーラに愛を告白し、二人は性的関係を結ぶ。別の日、川で泳いでいるとエジクがヴァーリャと歩いているのを見てショックを受け、入水自殺を試みるがエジクに救われる。一ヵ月後、兄とエジクは進学のため別の町に行く。エジクからの手紙がこない一方で、ヴァーリャは自分宛の手紙を見せびらかす。ヴェーラは入水自殺を試みる。ヴァーリャは郵便局で働いている姉がエジクの手紙を横取りしていたと白状する。ヴェーラは死ぬ。エジクは他の誰も愛さない誓いを立て、一年後に飛行機事故で死ぬ。（テキスト 2 種）

⑪愛の物語（ヴァーリャとエジクのダヴィドフスキイ夫妻の話）
Повесть о любви (Рассказ о Вале и Эдике Давыдовских)

革命記念日のための準備をする仲間たち、ヴァーリャは友人トーリャからエジクを紹介される。友人たち 4 人で映画『ヴォルガ・ヴォルガ』を観に行き、ヴァーリャとエジクは「同志 товарищ」になる約束をする。第 36 回革命記念日が訪れ、二人はキスを交わす。その後、ヴェーラはエジクの家族が住む共同住宅（コムナルカ）を訪れる。エジクの父親は二人が「ソヴィエト的な友達」になるだろうと言う。新年の仮装パーティーで、ジプシー女に扮したヴァーリャがエジクに「ブロンド娘のせいで死ぬだろう」と予言する。ヴァーリャはチフスに罹って入院するが、見舞いに来たエジクが今度はチフスになる。姉妹だと偽って病院を見舞うが、エジクは死んでしまう。ヴァーリャは卒業式の後にナイフで自殺する。二人は同じ墓に葬られる。1953 年、モスクワでの出来事だった。（テキスト 5 種）

⑫ファラオ Фараон

アパートのバルコニーに出たオーリャは、「ファラオ」とあだ名される不良グループのリーダーが自分を眺めているのに気づく。あるときスケート場でオーリャはファラオに会う。ファラオに送られて家に帰るが、ファラオが隠したせいで鍵が見つからない。二人はファラオの家に行く。オーリャは勧められてワインを飲むが、そこには睡眠薬が入れられており、なすすべもなくファラオと性的関係を結ぶ。オーリャは妊娠し、病院で子供を産む。退院するとファラオが待っていた。こうして彼女の自由な生活は終わった。（テキスト 5 種）

⑬余計な三人目 Третий лишний

卒業パーティーに出るため、リリカとヴィクトルは思い出にふけりながら二人で町を歩く。公園でリリカに横恋慕するスラフカが現れ、ヴィクトルを刺し殺す。リリカはガラスで静脈を切って自殺する。スラフカも後を追って死ぬ。

⑭マリイカ Марийка

オデッサが舞台。17歳のマリイカは大学生のセルゲイと二人で地質学者になる夢を抱いている。卒業パーティーでコムソモールのアレクセイが 6 年後にクラス全員で再会しようと提案する。その後でアレクセイはマリイカに告白するが断られる。翌日、海で溺れた少女を救おうとしてマリイカが犠牲になる。葬式でセルゲイとアレクセイはそれぞれ嘆く。6 年後にアレクセイとクラスの全員が集まってマリイカを思い出す。マリイカの墓は救われた少女が守り続ける。14 年後、セルゲイが子供を連れて墓を訪れ、死んだ恋人を思い出す。（テキスト 2 種）